会員の広場

素人のサラリーマンが定年後に二冊の本を出す話

吉村 輝寿（東京）

私は定年の二～三年前から「会社員生活はもう十分。退職後は文筆業を」と思っていた。早めのスタートが肝心と、仕事の合間を見ては「会社で見かける困ったおじさんたち」をテーマにパソコンを打っていった。

退職して半年、「パワハラ、セクハラへの対応」「部下のマネジメント術」などの原稿も書き上げた。それらを銀行時代の先輩のツテで出版社に見せたところ、雑誌に記事を書くことになり、次に連載が始まり、最終的には本を出す話になった。

本のタイトルは「支店長殿、ご指南申す」。最近の銀行の支店長が抱える問題にアドバイスを与える内容で「困ったおじさんたち」も章の終わりのコラムに登場することになった

と、まあ順調に来たのはここまで。

計算上は毎日原稿用紙一枚を完成させれば締め切りに間に合うはずだった。ところが、これが予想以上に大変なのだ。能力をはるかに上廻るスピードで執筆を強いられ、頭が爆発しそうになった。後になって編集者から「執筆が遅れることはよくあること。話してくれれば締め切りを延ばしたのに」と言われた時は唖然とした。知らないということは恐ろしいことである。

次の年に二冊目の仕事が来たが、今度は本当に脳梗塞になってしまった。さすがに「執筆はもう無理」と思った。ところが医師のアドバイスは意外にも「是非とも本は書いて欲しい。良いリハビリになる」とのことであった。聞いてみなければ分からないものである

二冊目は「銀行員のハッピー・サバイバル」がタイトルで、四～五十代の銀行員がたそがれ時をいかに乗り切るかがテーマだった。ただ出来上がってみると面白くも、せつない話が満載の本になってしまった。

文筆業に挑戦して色々と思った。

確かに包丁一本、自分の能力だけが頼りでやり甲斐もある。だが、仕事が来なければ即失業の厳しい職業だ。さらに原稿料は労力の割に低く、自分の場合は時給に直すとマクドナルドの店員にも及ばなかった。

そう思うと会社員もまんざらでもない。今の日本では四～五十代になれば、ボーッとパソコンを見ていてもクビにもならず、日に三～四万円はもらえる。「会社で見かける困ったおじさんたち」は実は個性満開で会社員生活を送っているハッピーな人達なのだ。

会社の仕事がウンザリで始めた文筆業で会社員生活を見直す。妙ではあるが、あり得る話である。